

蠅の斧

第二部

トークライブ2001

第三回

団 士郎

仕事場D・A・N／立命館大学大学院

年寄り臭い、ありきたりな言い草であることは承知で書くが、人は本当に自分の未来のことなど何も分からないものだ。後になって意味づけたり、説明することはいくらでも出来る。しかし事前に、そのように予測しうるかと言えば、そんなことは先ずない。結果を約束された未来のために準備することなど不可能なのだ。

出来ることと言ったら、その時、自分のしていたことを、結果の如何を問わず「よくやった！」と後で言ってやれるように最善を尽くす、これしかないと思う。こんなことをわずか十三年前の日誌を読みながら繰り返し思う。

さらにたいていのことは、本質的な部分はなにも変化しない。オプションは次々変わるが、基本は繰り返しが多い。それが人の生きてゆくということなのだから仕方がない。

そんなことを覚悟しながら読み返す13年前の日誌は、思いの外面白い。何を思って五十代前半の自分を駆動させていたのか。そんな事が少し見える気がする。

*

相変わらず家族が事件や出来事を中心にある時代が続いている。家族受難時代のようにも思えるが、少し考えてみるとそうではないことが分かる。戦時中には、各家庭で一家の担い手や息子が召集され、南方の戦地では沢山の命が失われた。それを戦争だったからやむを得なかったなどと、生き残って言う人を信じない。

私の人生六十七年を考えると、戦場に行かなかったし、戦死者を家族に抱えなかった。見渡せばいろいろあるけれども、幸運な巡り合わせであったことを否定する理由はない。私の父は戦地から戻ってきていたし、祖父も当然のように戦争に巻き込まれていた。私は自国の戦争が身近ではなかった初めての世代人なのである。

だから今、私達の社会が抱える様々な問題を、どのように発生予防し、起きたことに対応するかを考えるのは、我々の仕事である。過去からの教訓に学ぶことも大切だが、それだけではなく、今の社会が指し示す出来事の中から、未来への教訓も引っ張り出しておかなければならない。

人は愚かしい。なにもかもに飽きるし、やっと手にした平和に退屈する。こりごりだと思ったはずの過去に簡単に決別し、刺激を求めて根拠薄弱な暴論を口にする。長持ちしない言葉は空しい。十年もしたら誰もが忘れてしまうような言い草で、平均八十年ほどもある人生をカバー出来るはずがない。

●今回、2001年5月の日誌を読み直してみて、一番の驚きは、全く記憶にないことが登場していることだ。記憶はたいてい、少々ヒントを与えれば再認は出来るものだと思っている。だから全く記憶にないこの事態は、少々恐怖である。「絶対にそんなことはない！」と確信を持って言ってしまう嘘が存在し始めているということだから。

2014/09/10

2001年5月(13年前)

05/01 5月になった。GW中だが、感覚がそうではないので同志社女子大(非常勤講師「ユーモア特論」担当)の授業、休講など考えもしなかったが、休んだ方が学生は嬉しかったのかも。ほとんどがよく聴いているので、ごく一部の息の合わない学生が目についてしまう。ケータイを手放さず、ずっとメール送信している姿を見る。立命館大の「人間関係論」では10倍の学生がいても、そんな姿を目にすることはない。彼女の中に住みついている「授業」イメージから解放してやらなければならないなんて使命感が芽生えている。

夜は草津で「男の子を育てる母親向け性教育本」の最終編集会議。時間がかかってしまったが、ライト感覚の本ができたように思う。最終の手を入れて、形にして出版社に打診しなくてはならない。ひょっとしてブレイクすると面白いのだが。

女子大の講師仕事は二年で修了した。「一年間でユーモアを理解するいい女になる」という趣旨のシラバスはなかなか良いのではないかと思っていたが、短大の廃校整理に伴う人員合理化の余波でクビになった。

「ちんちんがやってきた」(学苑社刊)、この本は絶版にもならず今に至っている。私が深く承知している世界というわけではなく、4人の女性教師と漫画家・外村晋一郎の合作である。今もたまに話題になることがあり、ロングテール商品とはこういうものかと思う。



05/02 GWということで、こと葉(*1)が戻ってきているが風邪気味で体調不良。専門学校(舞台芸術学院)や東京暮らしはとても楽しいらしい。

依頼より早めに完成できないかとSさんからFAX連絡があった仕事を仕上げる。なかなかきれいな仕上がりになった。(*2) GW中であるが、関係なくどんどん仕事をしている。片付いてゆくのが結局一番のストレス解消。

夕刻、教育相談員FくんがケースSVを受けにくる。彼の話を聞いていると、チームでケース検討せず、受けた者専任で、年度末には例外なくいったん終決なんてシステムは、何が目的の相談機関なのかとさえ思う。

新年度には、同じ生徒を新規相談の受付としてカウントするのだそうだ。学校教育の枠組みに、カウンセラーがずるい関与をすると、こんなことになるのだろう。戒めておかないと、数を根拠に大変さを煽る世論や、骨惜しみな口先文化人のようなカウンセラーが学校教育場面に湧いてくるだろう。

どうあろうと、学齢で押し出してしまうトコロテン処遇が、学校に於けるカウンセリングを弱いモノにしていると思う。

そして怪しいエビデンスの一つが数値である。数え方に言及できずに、総数であれこれ言うのが空しい事は、昔から言われていることだ。

例えば不登校児童は進級させないで留年、そう決めただけで教員も親も本人も、統計数値も変化するだろう。これは決して本人へのペナルティなどではない。

現行の、取り組みの質も、結果も関係なく卒業させてしまうシステムが中味を貧しくしている事への提案だ。

05/03 午後、Kさんが個人相談室開設の相談にやってくる。彼女にすれば不当な人事異動発令を受けて、公務員退職の決断をしたものだ。経過はともかく、新しい人生をスタートさせるきっかけになったことは悪くない。何かが始まるには、最後の一押しをしてくれる要素があるものだ。それにしても私の回りには途中退職者が目につく。

ベテランが定年退職を待たずに退職を選択す

る。職場の同僚は急に戦力が抜けてしまう不安を感じただろう。しかし長い目で見ると、いつまでもベテランが居座っている組織が良いとは言えない。途中退職者のその後は、元の組織員にも聞こえてくるものだ。その内容が励みになったり、自分の今後を考える種火にもなるだろう。定年退職時期が目安ではなく、いつでも世代交代できるように、次世代育成が取り組まれているシステムが健全というものだ。

05/04 「木陰の物語・第十五話」をなかなか描く気になれずにいた。こんな時って、あれこれちよつとずつネタがあって、そのどれにも突っ込みきれない。でもタイムリミットは来ていた。そしてようやく、全然違うテーマで点火した。ゼスト御池(京都地下街)の喫茶コロラドで話をまとめて下書き。仕事場に移ってペン入れをする。正午くらいに始めて、夜九時過ぎに一応完成。

調子に乗って月刊DAN通信の日誌のまとめに入った。のってくと驚異的効率で仕事ははかどる。ここで飛ばしておいて、一日、二日クールダウン後の目で読んでみるのが楽しい。眼鏡が見当らなくなった。



この時点で、まだ第15話。現在174話だから、積み重ねは大きいなあと思う。多分このころ、いつか単行本になって出版できると良いなあとは思っていた。しかし一方、漫画本の出版は難し

いことも知っていた。それが今、第五巻まで出ている。十三年の時間は現実を大きく変えている。

05/05 桃山KISWECの面接日。朝一番はSさん夫婦。妻が朝、通院後、少し遅れて来談。娘、息子、夫婦と三軒のマンションに別れての近所暮らし、それなりにやっている様子。

午後一番は新規ケースで、私の本を読んだという工務店経営のMさん。Hさんに担当してもらう。両親は自分たちのしていることに自信を持っているようだが、こどもは壊れかかっている。

肥満、過食、不登校、高校中退など、何があっても、自分たちは一般よりも愛情あふれた、子煩悩な親だと主張する。娘の必死の主張にも、すぐさま反論を試みる親である。

バイト先や親戚の店では、ちゃんとやっていることに気づきはないのだろうか？初回の面接ビデオを見ながら、反省会をしてみたら良いのではないかな？

三時からのKさんケースは無断欠席。予約した意識はなかったのか？GWは旅行に行くといっていたのだったかな？

仕事場に戻って、トーク2001用月刊DAN通信を完成。「人間関係論」の授業で配るバージョンも作る。雑誌「編集会議」と「ジグソウパズルの男」購入。最近、買ったのにまだ読んでいない本が増えてきた。

当時は京都国際社会福祉センター(KISWEC)で、土、日に時間をとってケース対応していた。最近はこちらの多忙もあってケース数が少なくなってきたが継続中だ。この時の家族は十三年経った今、それぞれどうしておられるだろう。

05/06 明日からは走りっぱなしの連日になる。眼鏡が見あたらないので、古いのをかけているが度が弱い。「メガネの愛眼」にいて、映画観賞用にピンポイントタイプのメガネを作る。

出来ることは今日のうちにしておかないと、と思っているのに、なかなか本の製作に手が伸びない。雑用をこなしてやっと「ちんちんがやってきた」の出版社プレゼン用

の作業に入ったのは四時過ぎ。三時間、集中して半分まで形にする。残りは明日だ。

帰宅夕食後、次男が薦めていたという映画「リトル・ダンサー」を典子と観にゆく。OTSU7シネマの会員制度が告知されていたので入会。格安で観ることができる。もう1800円で封切りを観ることはなくなっている。

「リトル・ダンサー」は原題「ビリーエリオット」。映画から舞台になって、今もロングラン中のロンドン発ミュージカルになった。

しかし、これを映画館に出かけてみた記憶が全くなかった。長野県での講演会のためにDVDを購入して観たと思いこんでいた。記憶なんて、あてにならないものだ。だから「確かに覚えている！」なんて言うものではない。

05/07 立命大の人間関係論4回目。三年目になる家裁調停での体験絡みで、時代の人間関係を話す。人は騙されたがっているのかもしれないという話。

正式の受講登録者数が確定。1011人、そんなバカなのである。レポートを読むのがまた大変だ。割り当てられた教室は530人くらいのキャパ。これで良いのか？と思う。今日の授業もいささか不完全燃焼。どうしてだか、この頃クリーンヒットにならない。

終了後、大学院事務室に顔を出すとあれこれ郵便物を渡される。Nさんが顔を出して、院生のMさんの地域活動協力依頼の話などする。院と地域社会をどう結びつけるかの手練手管について話す。

大学院の建物が竣工し組織も動き始めているが、まだばたばたしているという。健康保険証が出ているというので、職員課に取りにゆく。家族それぞれにカード保険証がでている。合理的だなーと思う。

性教育本の制作二日目。5時すぎに仕事場に戻って、集中してかかって11時まで。だいたい形になってきた。しかし、よく働くものだ。この作業中、立命から電話。文学部では1000人を越す授業は初めてなもので、他学部に教室を融通してもらう段取りだとか。

とんでもない受講数だと思う。レポート提出時期には、毎日カバンに100通ほど詰めて、移動

しながら、のべつ読んで採点していた記憶がある。

05/08 午前中かかって、「ちんちんがやってきた」の漫画と文字原稿をとりあえず本の形に完成させる。執筆者たちに返して、意見をもらって校了にもってゆく。女子大のミニレポートに目を通して、話の展開を決めて早めに出発。今日の授業は、今年度一番のできだった。学生の集中度、関心の持ち具合がフィットしていた。この出席は45人くらいである。今夜からまた一年間、KISWECの家族療法訓練も始まる。定員に一人多い11人の参加。

とにかく仕事の数をこなしているなぁと思う。若かったのだろう（今より）。

05/09 明日の下京区役所主催の講演会、レジュメを練る。明後日のトーク2001のプランも。H大のHさんから、特任教授をうちでやらないかとの誘い。立命館のことも知っていて、契約は何年？と聞いてくる。新潟のOさんから7月のWSの事で電話。

夕刻、八日市へ向かう。M小学校の教師勉強会が三年目に入る。二十一人のエントリー、よく続けし、よく学ぼうとするものだと思心。遅刻しても良いからかならず来るようにとメッセージ。初参加の人も四人。

提出事例に、いわゆる教員のくせがもろに出ている気がする。曰く、愛情不足、父親不在などの決め付け物語り。そして最後には母親から、「あんた達がイロイロするから娘がこんなになったよ」と批判攻撃される始末。

能動的指示しか地質にない教師である。ぼつぼつ学んでいってもらおうか。

帰路の車中、Hさん、おおいに語る。JR近江八幡着自国が最悪で、電車は22:11に出たところ。次は38分という。おまけにやっと着いた膳所駅も、乗り換えの京阪電車は出たところ。また20分待ちはうんざりなのでタクシー。1030円かかってしまう。

八日市市（元・東近江市）へも長年通った。教員主体の家族勉強会は今も草津市で継続中である。「学校」と「家族」を繋げることの重要性をずっと言ってきたが、私の力不足なのか、世

の中がその認識を共有してくれないからなのか、なかなか拡がらない。一人職のSSWでは弱いのだ。教員はたくさんいる。その人達の家族理解がもう少し深まったらと思い続けている。

多方面、多分野で「家族」の重要性は認められてきているが、そこからの展開が弱いのは、家族療法・家族心理学を担っている者達の力不足だろう。技法や流派理論の中の住人である限り、今のままだろう。

05/10 木曜日、朝の相談室は予約がなかったのに、本庁担当部局の若者二人がやってきて、つい話し込む。午後はキャンパスプラザ京都で下京区の人権講座。200余人参加。本を50冊足らず持って出かけたが、販売はそう期待できないかと思っていた。なにしろ参加者の年齢層が高く、男性も多い。ただ、話はえらくノリノリで受けた。その結果、書籍は完売となった。この空気よく覚えておこう。

終了後、明日の資料を取りがてら、本宮の両親宅を訪ねる。久しぶりに茶を飲みながら話す。二人とも元気で何より。

夜は草津の教師勉強会、少し早めに会場に到着。サンドイッチとお茶をと思って買っていった。ところが会場がしまっていて焦る。仕方なく隣の芝生にキャリーバッグを置いて腰掛けながら町中のピクニック気分。通る人が見る。定刻過ぎに鍵を持ったWさん到着。いつものように勉強会は進行。

頼まれ講演で分かりやすく、面白く話すと本が売れる。少しシリアスに問題提起すると、てきめんに本は売れない。送った本が沢山残ってしまうのは恥ずかしい。でも早々に売り切れてしまうのも残念だ。商人ではないのに何冊発送するかは今も悩む。

05/11 朝から月例トーク2001、二回目の準備。あれこれ思うことがあって手間取る。この間に住友金属に電話。「きれいなものが仕上がって…」と喜びつつ、またごちゃごちゃした注文が出てくる。関係者がいろんなことを言うのである。何度も彩色するのは嫌なので、提出物で対応

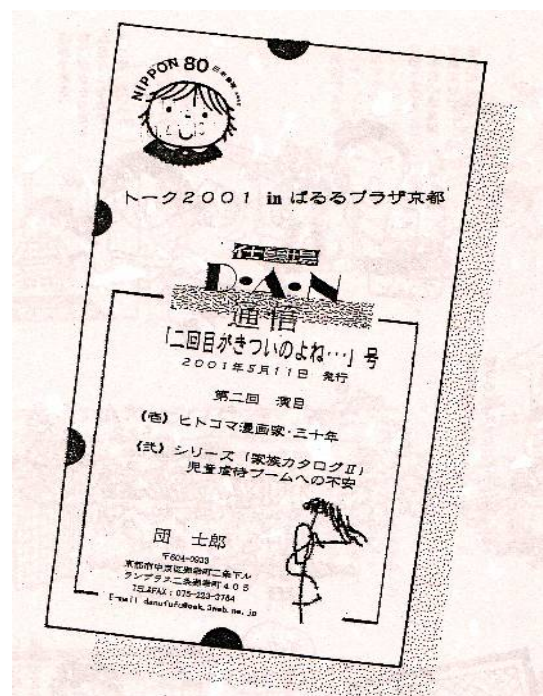
をしてくれるよう頼む。良いものは作っているのだから、黙って受け取れば良いじゃないかと思うが、通りがりの上司のようなのがいろいろ言いたがるものだ。

開演1時間前にやっと準備完了で会場へ。出足を心配していたが、前回同様の人数が来てくださった。連続参加者ばかりだったわけではない。ちょうどいっぱいので、気持ち良く話す。

一つ目のひとこま漫画家30年はいわば話し慣れたこと。二つ目のブームについてが、内容を用意しすぎた気がして端折ったら、思いの外、時間があまった。そこでもう一度戻って、端折った話もしたので、私の日常会話のような話し具合になってしまった。

K君がこれを称して、講演的ではなく、普段喋るように話す講演で、これはなかなか誰でも出来ることではないと言った。

顔見知りの人や勉強中の人、大学生、大学院生、教師など、いろんな所から来てくださっていることに感謝。後からテープ録音を聞いてみると、もう少しゆっくり丁寧に話したほうがいいのかとも思うが、持味は出ているし、いいかな。



トークライブ2001、二回目。自分で会場を確保し、受け入れ準備をし、待ち時間の友にと「D・A・N通信」を作って手渡す。入場料1300円余りを頂いているから、もてなさねばならない。依

頼られて出向く講演会とは真逆の設定だ。

それでもこんな事がやりたかったのは、ミュージシャンのライブを羨ましく思っていたからのような気がする。あるいは、落語家か漫談家になりたかったのも影響しているのかも。でも、そこに唯一ためらいがあったのは、あの人達は毎度同じ歌を唄って、話をしている、飽きてこないのだろうか、嫌になったりしないのだろうかという事だった。それは学校の先生が、教室を変えながら、おなじ話を繰り返しているのを見ても思っていた。

トークライブでは毎回違う話を三十数回した。そして、同じ話であっても、まったく同じには出来ず、繰り返すほどに、上手く話せたと思えることは希だということにも気づいた。

今では、同じ話なのに、毎回違うと思って貰い、話している自分にとって満足度が上昇する技は、どんなものかに関心が強い。

05/12 KISWECで「教員のための家族援助WS」、第一日スタート。14人の参加者、養護学校、高校、私学、公立さまざまである。所長があいさつで、スクール・ソーシャルワークの話をしたのに驚く。なかなか定着しなかったプログラム企画だと語る。参加者はみな意欲的で、個性もヴァリエティに富んでいる。途中、H君の担当している時間、久しぶりにうたた寝する。今朝早かったからな。

終了後、仕事場に戻るが土曜日の夜なので、事務連絡はない。メールチェックすると、昨日のトークライブの感想が二通。怒濤の一週間が済んで、ほっとしている。来週がゆっくりするわけではないが、まあとにかく今週は済んだ。

夜中に見た、自分の懐かしい曲を聞いたり語ったり、歌ったりのTV番組がえらく心に残る。

教員対象の集中事例検討プログラムは、残念ながら続かなかった。SSWが表に出てくるようになった今、ますます必要なプログラムかとも思う。でも、十分多忙で、もうそこまで手は出せないかなあ。

05/13 日曜日、昼過ぎに仕事場 D・A・N に。朝日新聞読書欄、話題の本を面白くなかったと書く小野寺某。参考にして買うのをよす。読売新聞の読書欄、永沢まことのイラスト以外見るべきものなし。安藤忠雄の教会造りの本が大宅賞を受賞。発売されてすぐ読んで面白いと思った本が、みんなにも認められて嬉しい。道中、糸井重里著「ほぼ日刊イトイ新聞の本」を購入。インターネットで発行されている気の入ったネット新聞創刊顛末記。このホームページはよく見る。鳥越俊太郎がやっている「あのくさこればい」というニュース解説が面白い。

S. ソダーバーグ監督「トラフィック」を観る。複雑な映画だが、メッセージのリアリズムはドキュメンタリーだ。「麻薬戦争に、もう政府は負けていることを知っている。摘発や密告は、対立業者の利益になるだけ。相手はそれを知っていて、麻薬取締官を利用している。密告はもう一方の麻薬密売勢力の仕業である。国家予算に負けない収益を稼ぎだすビジネスを、正義で取り締まれるものか・・・」。

一般家庭、青少年の生活に入り込んでくるドラッグ。能動的被害者である子供を、敵には回せない親の戦いは、どこを向いて長期戦略をたてなければならないのだろう。禁酒法のようなやり方しかないのかと思った。つまりは敗北である。アルコールをやらない私は、依存や飲酒による病気などを見て、これが必要悪と認められるようになった経過と、ドラッグの違いを思う。

国家統制で、税金を徴収のうえ、ドラッグを販売する国が出てきてもおかしくないということか。本当に、酒、博打などのうまい話は国がマフィアが取り仕切るのだな。

最近、こんなに活発に考えていないかもと反省する。今もなくなっているわけではないが、社会への疑問や不満が言葉の端々に感じられて頼もしい気がする。

でも近年は、批判のインパクトは抑え気味になった分、具体的に取り組める事への意欲は増している気がする。「言っていないで、やれ！」と自分に言っている。そして取り組み始めて、随分長い時間が経ったものが多くなった。

結果が成果なのではなく、続けて取り組んでいることが成果なのだ。

05/14 月曜日、人間関係論の教室が変更になった。1000人教室である。五年前にここを使っていたが、散漫で好きになれなかった。今回も最初に、十分そのことを受講生と協議したが、やはり影響はあった。以前の教室の方がずっと一体感があった。終了後、大学院のNさんを訪ねたが会議中のようなだった。それに院の研究室は新棟に引っ越していた。私の研究室(相部屋だそうだが)がどこなのかもまだ分からない。夜はN本さんがSV来談。二時間話して帰る。権威主義的体質と過剰な自己防衛の習慣から抜け出すのは、なかなか大変。こういう人の職業選択として、高校教員というのはどうなのだろう。話題になっている生徒の話の方がずっと健全。そういう子に支えられているのだろうが…。

05/15 KISWECの家族療法訓練、いよいよ今年も健康家族面接の開始。ボランティアで来て貰った家族。両親と、長男、妹の四人。長男が最初から女の子に見えて、とても一年生とは思えなかった。入室前にトイレで失敗して、本人も親も焦っていて緊張。妹は活発に、家庭事情の暴露役をしている。

夜中に見た「カル」は変な映画だ。一度見て理解できた日本人はないと思う。そういう声が大きかったのか、ビデオの後でインターネットになぞの解明したホームページがあると案内している。グロテスクだが分かりにくい、編集失敗の映画だろう。理屈を考えれば、全体像は頭のなかに描けるのだが、映像として出ていないから、観客はなんだか分からない。

この面接も映画も、あきれたことに全く記憶がない。印象的な出来事があったはずなのに、忘却処理に私の記憶装置が働いている。なんでだろう？

05/16 一日くらい、仕事場でじっとしている日がないと、雑用が片付かない。空いているところを見つけて、新しい依頼を入れるからどんどん窮屈になっている。朝ぐらいゆっくりして、睡眠は確保をと思うと、午前中はほとんど何もできない。住友からのパンフレットOKのFAXに返信。群馬のWS時間などの打診。門真勉強会の準備。ち

よっと早い目に出て、吉野屋で昼食後、京阪萱島駅へ。待ち合わせ場所が変更になったので、不安だったのだ。駅前のミスタードーナツで読書。やはり「心はどこで壊れるか」はとてもおもしろい本だ。滝川一廣さんは鋭い指摘を連発している。

十八時から教員の勉強会。オープニングトークの後、事例が出てその検討。二時間半はすぐに過ぎる。



あらためて、この時期から今に至るまで、行動の軸はそんなにかわっては居ないことに気づく。確かだと思えるものを摸索していた時代ではあるが、その結果、多くのスタイルが継続して今に至っている。コロコロ変化する世の中や言葉（流行語）にアンチを強く主張した過ごし方である。

05/17 朝、相談室。Kさんの息子が、治療施設入所に向けて動き始めている。自分から父親に話しかけたりしたとか。母親も一安心している。

Sさん一家の娘達は、長女は頑張って定時制高校に通学中。次女は、医者への指導で膀胱を発達させるための我慢を自分で訓練中。みんなにこにこしている。

無印良品へ行ってファイル30個購入。久しぶりに昼間、河原町をうろつく。夕刻、カワキタカズヒロ君の個展を見に岡崎公園に。とても綺麗である。典子が車をこすってしまったと落ち込んで電話してくる。

様々なケースと関わっている。関連施設の利用

も当事者判断はサポートするが、こちらから薦めたり、紹介したりは一切しない。

自分の手に余るからといって、よく知らない誰かにふったりはしない。どのような援助者と出会えるかもクライアント、家族の運の一つである。私との出会いだって、それを幸運だと押しつけることはない。場合によっては不運かも知れない。押しつけもしないし、巻き込まれもしない。面白いけれど、クールな臨床家のつもりである。

05/18 仕事場で群馬WS用のファイルなどをピックアップして東京行きである。こと葉の通う舞台芸術学院、たたずまいぐらい一度見ておこうと思う。池袋西口から徒歩5分ほどの静かな住宅街にある学校。隣の教会は知人のUさんが関わっているところだと聞いた。

携帯に連絡すると今終わって、着替えているという。学校の前で待っていると、学生が数人、どこから戻ってくる。その中の4人連れが目礼して、「こと葉のおとうさん？」と話し掛けてくる。仲良し6人組である。しばし歓談していると、こと葉が出てきた。

池袋駅前でコーヒー店で、学校の話を楽しく聞く。あれこれ意欲的。モダンバレエは授業後に、夜のレッスンに出向いているらしい。声楽も考えていることがあるとか。クラシックバレエは物足りないので、習いにいくことを考えているとか。

ボブ・フォッシーの話や、NYブロードウェイ・ミュージカルの話題など、だんだんその世界に馴染んできている様子。てんぷらが食べたいというので、西武7階の「天一」へ。なかなかおいしかった。八時前には別れてホテルへ。二度目の利用の西麻布apaホテル。

東京で一人暮らしをしながら学ぶ娘に、父親が面会に行き食事をする。絵に描いたようなパターンだが、そんな時代も昔話になった。

この後の10年に娘に起きたことを知っているから、この時点の記述の一つ一つが夢のようだ。まだ何も始まっていないところで、努力する対象を見つけた娘が頑張っているのは、父親として幸せだった。そして、今、それを振り返れるのは二重に幸せだ。何もかもが時を刻んで、過去に

なってゆく。書き記しておかなければ、いずれ誰の記憶にも残らないモノになって消える。

先日、遅い目の夏休み谷川岳の麓、谷川温泉に出かけた。散策していると「天一美術館」というのがあったので覗いた。洋画、日本画共になかなかの画家達の小品がコレクションされていた。

このコレクターが天ぷら「天一」の創業者だという。今まで気付かなかったが、これを書いている天ぷら「天一」が登場している偶然に驚いた。

05/19 西麻布のhotelをゆつくり目に出て、上越新幹線で高崎に。高崎高島屋で昼食とコーヒー。約束の時間に前橋着。早々にプログラム開始。いつもよりちょっと少ない23~4人の参加である。

全国児相の児童福祉司数の一覧を配って話す。群馬はびりから二、三番目の実態。つづいて合同動的家族描画法のデモンストレーション。楽しい家族が出てきて盛り上がる。夕飯は前回も利用したホテルの個室で6人。前橋家裁・M調査官も参加。若い世代の資質低下を嘆くが、その理由に、上世代の力量不足ありという。もっともだ。

群馬WSはIさん中心に数年継続した。関連して、いろいろな動きも起きていた。児童相談所が中核を担って、地域で様々にプログラムが発展してゆくのは本意だった。この時の参加者で、今、実施中の東京・家族理解WS（アソブロック）に参加してくれている人がある。これも10年以上付き合いである。

05/20 出先で54才になった。前橋（群馬県）のこじんまりしたホテルで起床。9時10分に迎えが来て、一日プログラムを実施。まず順調に参加型のWSを終了。

帰路の新幹線で、来るときに観はじめた「グラディエーター」終了。映画館で観た時よりも感動的。吹き替えの方が、画面に集中できるのかもしれない。続いて、「イングリッシュ ペイシエント」を観る。これも映画館で見たときより感慨深い。

「イングリッシュ ペイシエント」は好きな映画である。DVDを持っているので、この後とも

う一度観たが、オープニングからの映像美に引き込まれていく。そして物語が何か変なところにも心惹かれる。戦争、戦場、その時代、立場、そして場所。これらと不確かな人の運命が絡み合う。



「グラディエーター」は、何が起こるか分からないと語りながら、起きることが分かっている物語。そして「イングリッシュ ペイシエント」は、分かったことが起きているのだが、誰にも分からない物語だ。

05/21 立命の学部の授業。続いて大学院クラスターの第一回。Mさんとも久しぶりに会う。研究室、Rさんと共用ではあるが421号室。大学内に居場所があるのは良い。床に寝ころんでウトとしてしまった。16時20分から授業開始。Nさんの進行ですすむが、今後どう展開してゆくか？

借してもらって聞き始めたMさんの講義テープは、なかなか面白い。緻密、正確の人である。

05/22 仕事場でメール対応。女子大からの問い合わせ、履修登録トラブル学生の件を調べる。

「届かなかった手紙」クレスマン・テイラー著、見つけて購入、読了。何だか気味の悪い話だ。登場人物の人間関係を、元々そんなにいいものだったと思えない行間である。「朗読者」「ベルリン1933」には劣る。書かれた時期が1938年であることを考えると、それはすごいことだが、本当なの？とも思ってしまった。

女子大の授業、ここまでちょっと小話大会になっていた。活をいれる気で性的虐待の中三女子の物語をする。約1名、どんな話をしても私語する奴がいる。60人足

らずは固唾を飲んで聞いている。教室が大きすぎるのが問題点。場の凝集力のことを思う。

夜は、kiswecの訓練。お願いしてあった健康家族、40分近く遅刻、これ自体が訓練テーマとなりえる。やはり本物の家族はロールプレイではなくおもしろい。Mさんが面接担当。上手だが、長男への面接に終始した。ストレスのかかる質問は、本当にしにくいものだ。

最近、読みやすいものばかり読んでいるのではないかとフツと思った。厚い、文字が小さい、二段組、などの形式から選択が逃げているのではないか。

05/23 タイヤ付け替えのため、典子に指示されて本宮に運びにゆく。オヤジをプリンスホテルで行われる同窓会に送ってから、駅で降ろされて仕事場へ。

立命の職員紹介書類の作成に手間取る。昨日の授業を受けた学生から、自分の経験の告白メールが届く。そういう経験をしている人はけっして少なくない。

夜中、「クロスファイア」ビデオを見る。そこそこの長さで、いろいろ散りばめてあるのに、物語の厚みを感じにくいのは、主演女優の人間のみえなさか。何だか日本映画のパターンにある不幸と、母子だけの秘密・・・、こういう紋切り型が感じられてならない。犯罪もうんざりするほど紋切り型だ。

しかし、最近世の中がこの空気に似てきている気がして仕方ない。動機や人間としての行為の積み重ねゆえのやむにやまれなさなど微塵もなく、ただバカがバカなことをやっているようにしか見えない犯罪や事件は薄ら寒い。人間が薄っぺらくなってくると、刺激しかない世事に取り込まれるということか。

13年前にこう思っていた。そして今、更にこの傾向で突っ走る世の中だ。それをカバーする道具や理論が受け入れられ、みんなが揃って同じものを持ち、同じ事を語る。同じ気持ちになろうとアジる世論もある。

昔、笑い声の追加されたTV画面が鬱陶しかった。ここで笑えと指示されているようで不快だったのだ。でも今は、この話に感動しろと強要する

社会になって、お互いがそれを拡散しあっている。

05/24 札幌の家族療学会に出掛ける。この学会は久しぶり。助言者を頼まれたので、出掛けることになったものだ。事前に送られてきたレジュメを読むがさっぱりわからない。こんなものにどう助言するのかと思うが、まあ発表者の話をよく聞いてみようと思う。

昼すぎの飛行機に乗るために伊丹でH君と待ち合わせ。ANA札幌行きは満席。隣も学会行きの女性だった。初日はゆっくりしている。夜、一般公開講座を聞く。しかし、ここでも虐待、暴力被害者に関する、専門家の紋切り型表現の横溢を目にする。そんな反論の余地のないようなことを言っているのだからと思う。

この段階で既に「虐待」話は定番化している。そして解決や予防への道筋は今に至るまで、たいした成果は見せていない。家族心理臨床の現場の知恵が心理学の中でなかなか力を発揮できないのには、私にも責任の一端があるのだろう。

私なりに頑張っているのだが一方に、「なかなか、家族療法は根付かない・・・」などと弱音を吐く人が少なくない。自分が上手くやれないのを、方法・理論のせいにしてしまうのはいかなものか。業界のメジャーになり損ねたと、敗北宣言しているように聞こえる姿勢も気に入らない。

売れるか売れないかではなく、「家族」を扱う事への使命感がないのか？

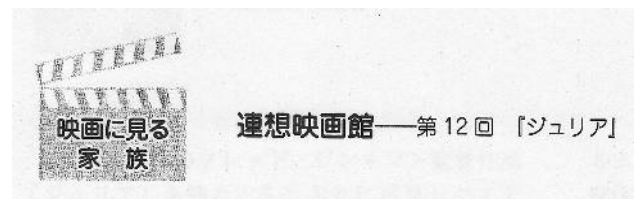
05/25 学会初日。H君の自主シンポに参加。彼がうまくコーディネートしている。現場での実践展開、みんな関係したところの人たち。午後の全体会での感想はある意味で、こういう学会にきた時にいつも感じるものでもある。学会にすっかり出てこなくなっていた理由をあらためて思う。「面白いと思わなくなったから・・・」と答えるだけなのだが、なぜ面白くないのかは解ってきている。こういうことの意味を感じ取れないからだし、こんなことして良いのか？と聞きたい気持ち一杯なのだ。

でも、そうしたら必ず、「じゃーどうするのか、団さんやって下さいよ！」と気軽に言う人があるのも解ってい

る。もう、他の場所で、他の方法で実践する方がずっと効果的だと気づいたのだ。

学会への参加、関与の仕方で揺れていた。しかしこの後、選挙で選ばれて「家族心理学会」の方は理事になり、互選で常任理事になった。そしてニュースレターの編集長も8年以上になる。(NLのあり方だけは変わったが、これとて編集長が交代したら、又変わってしまうだろう)

一方、この「家族療学会」の方では、ボタンタッチされて執筆し始めた「映画にみる家族」(連想映画館)の学会誌連載が10年近くなっている。学会誌に論文や専門情報ではなく、映画にまつわる話を毎回4ページも掲載していることには、いいのか？といつも思っている。



05/26 K出版のIさんと初対面。なかなか独特の雰囲気のある女性。つまり、ホワーンとした系のなかなかのキャラである。正反対の女性陣にはたくさん会うので、彼女のような人と話していると和む。(この後、Iさんは「ヒトクセある心理臨床家の作り方」を編集、発行してくれた。ここには巻頭に初めて、家族心理臨床を題材にした一コママンガギャラリーがカラーで掲載された)

学会二日目。座長を依頼されていた。病院で入院を利用してやっている一応不登校事例というのだが・・・あまりぴんとこない不登校分科会だった。私の司会がまずかったかと思ったりしなくもない。SVのI村さんもそつなく役割を果たしてくれた。

姉弟二人を入院処遇している親。要するに、健全な子育て機能を持ちえていない両親の可能性大なのだが、そんな話にはならない。つまらなく一時間を過ぎて、感謝もされずに終了、あーあ。その後のHさんの発表の方がおもしろかった。

午後、ジェンダーの自主シンポに入って、おかしな目に

あう。フィッシュボール・プラクティスというグループ討議。9名の参加男性のフリートークを、まわりで31人の女性が見ている。ヘンナノ。

千歳空港17:15発で大阪に。MKタクシーの乗り合いで京都に。21:00には仕事場D・A・Nに帰着。メールなど雑件片づけて、午前0時前に帰宅。夕飯後、「ボーイズ・ドント・クライ」ビデオを見る。ヒラリー・スワンクが賞をもらった演技。何だか切ない映画だ。「ダンサー・イン・ザ・ダーク」を連想したが、この方がずっと好ましい。

Iさんと会って、本を出して貰うことになり、表紙づくりに、出版社も訪問した。ハードカバーの良い本だと思うが、そう売れなかったようだそしてIさんは他に移っていった。



学会の司会、助言者を断るようになって久しい。査読も断っている。今は、自分の得意だと思うことだけをしている。

05/27 日曜日、一日かかってマンガ原稿を仕上げられればと思っていた。しかし、やはり北海道行きの疲れはそれなりにあって、屋すぎまでグズグズ。

出勤途上ゼストの紀伊国屋で「もひとつま・くら」柳家小三治著を見つける。一冊目「ま・く・ら」がとっても面白かったのでCDまで買ってしまったものだ。

それとOさんが批判していたKさんの編著の現代のエスプリ「学校心理臨床と家族支援」を購入。この対談写真で、昨日札幌で挨拶してくださったのが中釜さんだったか……と思い出す。Kさん批判は、学会のWSやシンポに、全く準備してこずにさんざんの結果ということが、立て

続けだったとのことについてだった。忙しすぎると、そういうことにもなりかねない、自戒せねば。

仕事場にきたものの気がのらない。「メッツ・新庄」のドキュメンタリーを見たり、本を読んだりして過ごす。

典子が町内会の役員会で夜、本宮に行く。そこで落ち合う約束をしているので、八時半ごろ本宮へ。おやじ、おふくろ元気である。母がちょっと痩せたことに気付く。聞いてみると、一年一キロずつ減っているとか。親父が買ったものの、大きくて着られないSONY通販のフ란ネルのシャツをくれる。上物である。

耳の遠くなった親父が、ヒトクサレ時事放談をすると、母はうるさがる。まあいいではないか。ラジアルタイヤを車のトランクからおろすのを頼まれていたので運ぶ。

典子が戻ってきたので、豆ご飯をもらって帰宅。九時半頃から二人で夕飯。我が家のメニューにしめじご飯があったので、かやくご飯二色。

そうか、13年前、まだオヤジもお袋も元気だったのか。そう考えると、10年という時間は激変をもたらすのだなあ。この時期、私と妻は浜大津のマンションに住んでいて、自宅の自治会活動に戻ったりしていた。

この時点で、私はまだ中釜洋子さんを識別できていないようだ。その後、親しくいろんな話をしたり、学会の度に、彼女の院生達も一緒にワイワイ食事するようになった。常任理事会などで、定期的に会うようにもなった。そしてあつという間に彼女は居なくなってしまった。なにも永遠なモノなどないのだから、今できることは、今しておかなければ。

05/28 月曜日は12時前の市バスで立命館大にむかう。いつもの59番がくる気配がないので、別のバスに乗って等寺院口で下車。知らない道からキャンパスに。定刻前に教室に向かうが、相変わらず多くの学生がいる。でも1000人教室だから、以前の教室でやっていたときのぎっしり感はない。あっちの方が集中したなあ。終了後、児童相談所のことを聴きたいと、先週から言っていた学生とラウンジで話す。

いよいよ大学院クラスターの修士論文のテーマの頭出

しを順次開始。3時間、3人の学生の現在の問題意識の披露である。それに対して三人の教員と学生が質疑。なかなかおもしろい三時間だった。

終了後、十九時四十五分のバスで仕事場に。八時半前について最終電車まで、原稿の推敲。

0時半ごろ帰宅して、メジャーリーグで活躍する日本人のダイジェストを見ながら夕飯。彼らを見て頑張ろうと思う。ポール・ニューマン「暴力脱獄」を少し見る。就寝はまたいつものように午前三時。でも十時頃まで眠るから、睡眠時間はとれている。

05/29 ゼスト御池のコロラドで「発達」の原稿の詰めと整理。本日発売の井上陽水のカバー曲CD「UNITED COVER」購入。それを聞きながら、冊子を読んでいると、おもしろいことが書いてある。「花の首飾り」をうたうことになったのは、沢木耕太郎さんが忘年会の流れでカラオケに行ったとき、リクエストしたのだという。

私はNHKの番組「ハロー、グッドバイ」の時に、陽水のコーヒールンバを聴いて、とてもいいと思った。あの時U A(ウーア)という女性歌手が歌った、「傘がない」も絶品だった。



女子大の準備を手早くして出発。ケンタッキーに寄ってから大学へ。先週印刷しておいたひとこま漫画の事を軽く話して、ミニレポート話に。今日は何だか出席率が高い気がする。

シンガーや歌の話は、どうしても世代の話題に

なる。陽水も沢木耕太郎さんも同じ世代人だ。音楽は簡単にその時代の自分の記憶に連れて行ってくれる。その曲の流れていた風景にワープできる素晴らしいパワーを持った装置だ。

漫画を描きながらいつも思うのは、マンガがそんな風に働くことが出来るだろうかということ。みんなが集まって、一つになるなんてコンサートみたいな事は出来ない。

ユーザーの違いもあるかもしれないが、漫画家にはミュージシャンにあこがれている人が少ない。

陽水さんや沢木さんなどのクリエイター達への関心は、14年経った今も変わらない。ただ、少し変化があるとしたら、あの頃ほど彼等の仕事に憧れは持たなくなったことだ。そんなものは確実に減退している。そして、自分のしている事への関心は深くなっている。バロメーターは世の中に起きている事への関わりの深さだ。相変わらずの好奇心は失せたわけではない。

05/30 季刊「発達」の連載原稿、最終校正にかかっている。テーマとリード文がちょっと気がかりだ。K出版での企画のリード文を思いついてこれも書く。

大阪でCさんと面談。ケースの話をしていて、あらためて自分が病気に鈍感であると思う。

「そのケースは境界例だと思うという。ちょっと魅力的で、まわりの人間をみんな引きずり込んでいく。そして事件は次々に起こる。これはそうでしょう」という。

依存、巻き込み、そして期待を満たされないと反発。私は父子関係のエピソードがどうも得心がいかず、インセストの問題が発生していないかと思う話すと、「そうだろうと思う」という。

佐世保の事件で又「病気」の話題が沸騰している。私は基本的に、人を分類や診断で区切る事へのためらいをずっと持ち続けるスタンスで、この業界で生きてきた。

それを絶対だと思っているのではなく、なにも絶対ではないから、立場は並立しているのが良いと思っているのである。

どの理論も方法も、普遍化できることはないと考えている。だから自分のあり方も絶対だとは思わない。そして、そういう姿勢を他者にも求めてきた。

ところが世の中やキャリアの浅い業界人は、しばしば時の勢いある売り出しのモノに巻き込まれて、取り込まれる。誰も彼もが同じ事を言い、結果には責任を持とうとしない。

その戒めに、10年前、自分はどんなことを主張し、世間はどんなことを言っていたかを振り返ることは大切だ。もっとも最近では、圧倒的多数の人が、十年前は全く別のことをしていたと語る。

これは戦争反対の姿勢にも繋がっている。知りもしないで声高に何かを煽る人間には用心した方が良い。忘れっぽい者や、知らない者に罪がないわけではない。

コントロールできないモノを作って絶対安全だと語って平気だった人間が、戦いの準備をしたからといって、戦争なんかするはずがないと語る。そういう人間が、手を変え品を変え、似たようなことを言ってきたのを忘れてはならない。

話を業界に戻す。数日前の発表で、小中の不登校が増加になったという。オイオイと思う。スクールカウンセラーやSSW、発達相談員や諸々の専門家がどれだけ増えたと思っているのか？

子ども数が増加に転じたとは聞かないのに、不登校だけ増えてどうする。いよいよ、専門家達が飯の種に、ダブルカウント、トリプルカウントする病人を作り出しているのではないかと懸念する。

統計数値はいつも、時代の欲望を映し出している。けっして、実態を示しているのではない。

05/31 朝は相談室。ケースがなくて助かった。疲れていたの、受付けのAさんにことわってソファで寝る。十二時ごろ変な夢を見て目覚める。

午後は家裁に。同居している妻からの離婚申し立て案件の二回目。次回成立の運び。

夜のKISWEC月例SV。Yさんが一件目のケース提出。借金地獄の中年の妹(独身)に振り回される、姉二人

の家族物語。次はHさん提出の、四人の子供を立て続けに産んだ二歳姉さん女房の家族問題。なかなかニュアンスぶくみの家族力動。あーあ、五月がおわった。六月も引き続きバタバタする。休憩を取る時間の工夫を。

この頃と比べたら、今はゆっくりしていると思う。忙しいという言葉はいつでも、今話していて、過去のことは忘れているらしい。今後、多忙であると言いたくなったら、歳の割にはと言うようにしようか。